

# 「北高応援歌」を読む

## 〔第一応援歌〕

一、乾坤一擲（運命を賭して、のるかそるかの勝負をすること）の機会が、今、まさに巡つて来て、

真つ赤な紅葉のように血潮が沸き立つてることだよ。

二、ここ八幡台の母校では今、秋闌の時季、

選手の門出にあたり、皆でその壮行の歌を力強く歌おうではないか。

三、（かの有名な司馬遷の「史記」の記述に依れば）始皇帝の暗殺に遭わされた刺客の荊軻は、風が物寂しく吹きあたり、寒々とした感じの易水のほとりで、仲間と水杯を交わしながら、始皇帝暗殺の決意を新たに表明し、その決死の大業を自他に誓うのであつた。

（この故事にあやかつて、母校の選手達は、いま、必勝を期して、この場に立ち臨んでいるのである）

三、剣士が道場で、厳しく、真剣に練習に励むとき（それぞれの練習場で厳しい訓練がなされて来て）

その気魄は全てを圧倒して  
思えば、虎を素手で殴り殺すほどの腕をもつてゐるのであるから、功名を立てられないことを嘆かずに、今度の戦いでは、きっとその腕前を發揮して見せようぞ。

四、この八幡台（北陵）に集う健児達よ

鳥帽子を仰ぎ見るこの母校の勝ち得た数々の栄冠は

君達が切磋琢磨して勝ち取ってきた武勇（輝かしい戦績）として  
その栄誉に輝く歴史として、長く語り継がれていくことだろう。

## 〔第二応援歌〕

一、ここ、八幡台には、自由、平和の鐘がいつも鳴り響いて

円なる泰平の時を過ごしてきた。

ふと気がつくといこの間までは、桜花の美しい春季であったのに  
いつしか時間が流れ、

入学以来この母校でいろいろな思いで作りをしながら、はやくも三年が過ぎて行く。  
二、ああ、若者達が泰平の甘い迷夢に耽つてゐるとき  
秋風が地を捲くようにして吹き襲つてきて  
騎馬の蹄の音も高らかに　　戦士達は競つて  
勝利を我が物にしようとする、その機会がいよいよ到来したのである。

三、炎々と燃え上がる、若者達の　　高鳴る血潮をじつと胸に秘めて  
遙か遠くの南の国（敵陣）を目指して　　勇み奮つて、進軍するのである  
我らは、自由自在に發揮できる実力をもつて  
戦いのその時がいま始まろうとしている。

## 〔第三応援歌〕

敢えて、口語訳をしなかつた。

## 〔第四応援歌〕

一、ほら、あの玄海灘では、今日も波が荒れて

雌雄の鯨が雄々しく遊泳し

軍艦からの汽笛が、夜明けの空に

響き渡り、潮騒の音もそれに加わつて

我らの胸の鼓動も、次第に高鳴つて

力一杯に行進曲を奏でることであるよ。

二、ただただ血氣盛んな

大男であるだけでは、いつたいどうするのだ。

せつかくの健児が、その力を發揮する機会がなかなか無くて  
この美しい秋季の月夜の下で

今度こそはその力を見せ時だと友と誓い合う。

三、ああ、あの栄冠のイメージの月桂樹の若緑

歴史と伝統を誇る、母校の流れ

軍艦が波静かに停泊する、この佐世保の港それを見下ろす一際高く聳え立つ山

その名も将冠という。何とゆかしい名前であろうか  
ここには、太陽は永久に照らし続けることであろう。

## 〔第五応援歌〕

一、敗戦の屈辱にじっと耐え続けて  
臥薪嘗胆の月日を過ごしてきたのだから  
どうして勝利をつかむことが出来るのであろうか。

二、ああ、敗戦のあととても辛い日々であつたことよ。  
男児の悔し涙があるのなら  
友よ、互いに大いに研磨努力して

立派な自立の精神を培つていこうではないか。

三、ああ、この伝統ある母校の流れに深く思いを致して  
この北陵（八幡台）にこの身をおいて

自強自律のこの優れた輝く精神に

激しい燃焼を感じながら、いざ、出陣しよう。

四、地を吹き払うような、真っ赤な  
わが佐世保を象徴する旗印

飛翔する、この熱球のような  
八幡台建児の高らかな意氣を發揮しよう。

## 〔第六応援歌〕

一、サハラ砂漠に夕日は沈み  
平和な日々に耽っている南国の

その情眠を覺ますような、夜明けの

民族自決の戦いの雄叫びに

革命の大志を抱いて、その意氣盛んに  
革命のためなら、なんて命が惜しかろう。

二、黒潮が渦巻いて流れる南の海に  
疾風が吹き興つて

ここ、八幡台にも、鳥帽子風が激しく吹いて  
雪辱を晴らさんと、今日も熱球を追う。

鍛えられた逞しい体の  
その胸の激しい思いと共鳴するのである。

三、ああ、この憧れ集う八幡台  
勝利を確信し、南国を目指して進む軍の

さあ、高らかに響き渡れよ、我らの歌よ  
榮えある勝利の象徴である

永遠の太陽の照り差す所  
大空に、勝利の歌、を高らかに響き渡らせよう。

## 〔第一校友歌〕

一、北の都〔ここ北陵（八幡台）〕では、いま、まさに秋闇あきだいがな

我らは、もう、成人としての夢・意志を抱き始めた

一人前の立派な男、女として

もはや、稚心などをどうして抱けよう

二、その無策はもう致し方がないのだから  
盃を捨てて、人生を深く思ひ悩もうではないか

そんな思い悩む我らこそ若々しいのだ。

我らは永久に青春の心をもち続けるのだ。

三、髪のふさふさとして美しい青年が

人情豊かな学園で培つた

熱い思いと厚い友情

そんな仲間と一緒に歌を謳える我らは、本当に若々しい。

四、自由のためなら命さえも惜しくない

主義のためなら命さえも惜しくない

この青年の高揚する意氣は

どんなものでも挫くことはできないのだ。

## 〔第二校友歌〕

一、それ、玄海（西海）の潮騒に  
鳥帽子岳は鳴り響く

ここ、八幡台の緑の地に 集う仲間は千有余  
高く揚げた校旗の下で

理想的な学園生活を謳歌している。

一、男子の胸には燃えたぎることだ。

真っ赤な血潮がふつふつと。

乙女がほほ笑むその瞳には

熱い思いが美しく秘められている。

ああ、ここは美しい学園。若者達の

華やかな交歓会が、いま始まろうとしている。

三、伝統と歴史を背にして

理想に強く生きようと誓う。

混濁の世に左右されることなく

臥薪嘗胆の想いを抱きつづけて

我ら北高健児の行く手には 妨げるものは何も無いのだ。

四、勝利の感動の歌声、勝利の声

それは、天にこだまして、地に響く

希望にあふれる若者よ

さあ、一緒に歌おう、勝利の歌を高らかに

我ら北高健児の行く手には 妨げるものは何も無いのだ。

### 〔戦勝歌〕

一、それ、北国の白い雪を

血潮で真っ赤に染めて敗戦したのはなんのためだ

北風は激しく、寒く吹きおろして

ここ、八幡台に吹き荒れて、我らはつらい思いをかこつて来た（しかしいま）

去年の雪辱を見事にうち晴らして

勝利の栄冠をここに勝ち取ることができた。

二、秋、木の葉が散る下で

軍は遙か遠く南国を目指している。

辺りには秋風が吹きすさび（しかしいま）

我らを凌ぐ敵は無く

胸に血潮が沸き立つて

勝利は遂に我らのものとなつた。

三、見よ、この佐世保の地の北陵（八幡台）に

黄金に輝く優勝楯

### 〔語意〕

〔乾坤〕 天と地。乾坤一擲とは、一か八かの博奕を打つこと。

〔易水〕 中国の川の名。戦国時代、燕の太子丹が、秦の始皇帝を殺すためにつかわした刺客の荊軻を送つて別れた所。（史記）

〔壯士一度決したる〕 上記の易水の別れで荊軻が始皇帝を殺す決心をしたこと。

〔図南〕 遠征または大業を企てる事。鵬という大鳥が九万里高く空にまいのばかり南の大海上に飛んで行こうと企てた話。（莊子「逍遙遊」に基づく）

〔搏虎〕 虎を素手で殴り殺す事。転じて無鉄砲な勇気の意味にも使われる。

〔髀肉の嘆〕 長い間、馬に乗らないので、ものの内側の肉が肥えてしまつたと嘆くこと。

〔何もしないでいて、功名を立てられないという嘆き。〕

〔中原に鹿を追う〕 帝王の位を奪おうとする。また、人々が競争して同じ目的物を得ようとする。

〔縣軍〕 後方の連絡がなく、遠く敵地に侵入した軍隊。

〔南浜〕 南方の水辺。南方の水辺の地。

〔鯨鯢〕 の雄のくじらと雌のくじら。鯨は雄、鯢は雌。

〔透徹〕 すきとおること。

〔艨艟〕 軍艦

〔葉港〕 佐世保のこと。葉の字は分解すると「サ世ホ」と読める。

〔自彊〕 自ら努力すること。

〔南溟〕 南の大海上をさす。

〔薪肝〕 臥薪嘗胆のこと。

〔北寒〕 北方の寒冷の地。

〔朔北風〕 北風のこと。朔北は北方の異民族の地。

〔搖落〕 木の葉が風を受けてひらひらと散ること。

〔肅殺〕 秋の厳しい気候が草木を枯らすこと。

〔崎陽〕 長崎を中国風に呼んだ名。

思えば県大会で奮戦した 愛志と情熱の結晶なのだ

北高健児千有余名、一齊に声をあわせ

さあ、勝鬨の声を、大空高く揚げようではないか。